

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：30105

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18037

研究課題名（和文）使用依拠モデルに基づく萌芽的構文・橋渡しの構文の創発に関する文法研究

研究課題名（英文）A grammatical study on emergent processes of emerging constructions and bridge constructions on the basis of Usage-Based Model

研究代表者

對馬 康博 (Tsushima, Yasuhiro)

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：50583093

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、認知文法の枠組みから、使用依拠モデルに基づき質的研究を通じて萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムを英語の構文ネットワークと関連づけて解明することを主たる目的とした。事例として、主題非明示型結果構文と無生物主語構文を取り上げて分析した。萌芽的構文や構文間の橋渡しの構文は、継承関係において構文ネットワーク上で定着した構文を結びつける重要な言語単位であることが明らかとなった。結論として、萌芽的構文・橋渡しの構文は、主要構文を動機づけている人間の認知メカニズムの一部を認知操作に基づいて継承することで創発し、部分的な重なりによりネットワーク上、主要構文と連続体を成していることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、使用依拠モデルに基づき、萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムを解明することで、自然言語の連続的な構文ネットワークの認知的動機付けを質的に考察していくという点において独創的特色をもったものであった。この観点からの研究は、研究代表者が調べた限りにおいて、国内・国外を問わず非常に稀なものであり、また、従来のコーパスに基づく量的研究からは明らかにされ得ない。研究成果の一部は中間報告として、雑誌論文などへの論文投稿、国際学会・国内学会などでの研究発表を通じて、公開を行なった。総括としての理論的一般化に関しては、今後も雑誌論文や研究発表などを通じて国民に広く公開を行っていく。

研究成果の概要（英文）：This research project focused mainly on clarifying emergent processes of emerging constructions and bridge constructions in the constructional network of English on the basis of the Usage-Based Model in Cognitive Grammar. The project analyzed Implicit Theme Resultative Constructions and Inanimate Subject Constructions as case studies. It revealed that emerging constructions and bridge constructions did work as the crucial linguistic entities that motivate connections between established constructional nodes in the network. It concluded that these constructions emerged via processes in which the constructions partially inherit cognitive mechanisms recruited by major entrenched constructions, and that the partial overlap of cognitive mechanisms affected the constructional network. These constructions, therefore, form a continuum related to major entrenched constructions in the network.

研究分野：認知言語学（認知文法・構文文法）・英語学

キーワード：使用依拠モデル 萌芽的構文 橋渡しの構文 創発 構文ネットワーク 認知メカニズム 認知操作

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、研究開始前までの研究活動の中で、萌芽的構文・橋渡しの構文としての「主題非明示型結果構文(Implicit Theme Resultative Construction)」や橋渡しの構文としての「無生物主語構文(Inanimate Subject Construction)」の構文特性に関して統語的・意味的・語用論的情報を明らかにしようと研究を進めてきていた。これらは本研究の基礎的研究となった。本研究では、これらの構文を次のように位置付けることとした。まず、主題非明示型結果構文(e.g. Our new washing powder washes whiter!)に関しては、予備調査によりタイプ頻度及びトークン頻度が低く、萌芽的構文のひとつと考えられる一方で、結果構文と中間構文の両構文の特性の一部を継承する(cf. Goldberg 1995 など)橋渡しの構文と位置付けた。他方、後者の無生物主語構文(e.g. The last year has taught me how little I really knew about what goes on [...]).(BNC))については、従来の研究では、行為連鎖に基づき、使役構文の一種として分析されてきたが、受動化できないなどの特性を示す事例があり、むしろ、Langacker の提起するセッティング主語構文(e.g. Tuesday saw yet another startling development.)と似た特性を示す事例があることが分かっていた。無生物主語構文は予備調査によりタイプ頻度もトークン頻度も高いと判明しているため、萌芽的構文ではないが、使役有生構文からセッティング主語構文への橋渡しの構文と位置付けた。

国内・国外を問わず、頻度が高い主要な構文の特性や発生の経緯については、コーパスに基づく量的研究、その他、文法化や構文文化の研究で明らかにされてきていた。しかしながら、頻度が低い萌芽的構文・主要な構文間の橋渡しの構文の創発のメカニズムやそれが主要構文に及ぼす影響について研究したものは、研究代表者が調べた限りにおいて非常に稀であった。この点を究明するためには、質的研究に基づいてアプローチする必要がある、本研究の着想の原点となった。

### 2. 研究の目的

上記の研究背景を受けて、本研究は、「使用依拠モデル(Usage-Based Model)」に基づき、Ronald W. Langacker (1987, 1991, 2008 など)の提唱する「認知文法(Cognitive Grammar)」(及び Charles J. Fillmore (1982, 1985 など)の「フレーム意味論(Frame Semantics)」や Traugott and Trousdale (2013 など)の「構文文化(constructionalization)理論」)の枠組みから質的研究(qualitative study)を通じて、萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムを英語の構文ネットワークと関連づけて解明することを主たる目的とした。昨今主流のコーパスに依る量的研究(quantitative study)では、必然的にタイプ頻度やトークン頻度(cf. Bybee 2007, 2015 など)が高く生産性も高い確立された言語単位が分析の対象として着目されがちである。一方で、頻度が低く、かつ、生産性も低くとも萌芽的構文して主要な構文と相互に影響しあい決して瑣末なものとして無視することはできないものもある。また、構文間の橋渡しの役割を果たす構文として構文ネットワーク上の主要な構文間を結びつける重要な言語単位となるものもある。したがって、このような量的研究の対象にはなりづらい萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムを質的に探ることは大きな学術的意義があると考えた。

以上の研究目的と学術的意義を受けて、具体的には次の3つの研究課題を設定した。

#### <研究課題1>

萌芽的構文・橋渡しの構文としての主題非明示型結果構文の創発のメカニズムを解明すること

#### <研究課題2>

橋渡しの構文としての無生物主語構文の創発のメカニズムを解明すること

#### <研究課題3>

萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムについて、使用依拠モデルの観点から構文ネットワークと関連づけて検証し、一般化すること

### 3. 研究の方法

本研究は質的研究を基本とするため、文献調査、英語母語話者の内省調査、そして理論的考察を中心に行なった。理論的枠組みとして「認知文法」、特に、「使用依拠モデル」を用いて分析することとした。さらに、適宜、「フレーム意味論」や「構文文化理論」を用いた。

また、言語データについては、大型電子コーパス(British National Corpus (BNC), Corpus of Contemporary American Corpus (COCA), Collins Wordbanks Online (WB)), さらにデータベース(Factiva.com)から経験的データを採取し、場合によってはウェブサイトのデータを収集して補強した。同時に、得られた言語データの信頼性を高めるために、適宜、英語母語話者に聞き取り調査を行なった。

### 4. 研究成果

#### <研究課題1>の研究成果

主題非明示型結果構文をめぐって、この構文は、タイプ頻度もトークン頻度も低く、他の構文とも独立した特性をもつ萌芽的構文として位置付けられるのと同時に、結果構文と中間構文の特性の一部を継承しているため、両構文の橋渡しの構文としても位置付けられるものである。本研究では、(1)この構文の初出時期を特定すること、(2)この構文が創発する融合過程にはどのような認知操作が関与しているのかを明らかにすること、(3)この構文が他と区別された萌芽的構文であるとすれば、どのような独自の認知操作を有しているのかを明らかにすること、以上の3点の解明を目指した。

まず、(1)に関して、調査から 1950 年代には出現していたことが分かった。具体的には、1950 年代のテレビコマーシャルにおいて、洗濯洗剤“Persil”の宣伝文句として使われていた。特にそのコマーシャルの中では、“Persil washes whiter!”という定型表現で用いられている。この事例は主題が非明示的であり、それを明示しようとすれば“clothes”, “shirts”, “sheets”のようなものになると思われる(cf. Arts 1995, 1997)。この表現はまた、一見すると統語的には非文法的ではあるが、使用域が「広告」ということを考慮すれば、主題を特定の明示するよりも敢えて非明示化することで製品が印象付けられるという効果が期待されたものだと推定される。以上のように、主題非明示型結果構文の典型例となる事例はこの時期から見られるものであるが、この構文のベースとなっているような諺表現として“A new broom sweeps clean.”(新任者は改革に熱心なものだ。)もあることも事実である。しかしながら、このテレビコマーシャルと諺にどのような接点があるのかを現在のところ突き止めることはできなかつたため、本研究では差し当たり初出を 1950 年代と特定した。

次に、(2)について、Langacker (2009)の認知文法におけるカテゴリー化の概念のうち、Standard/Target (S/T)に基づくカテゴリー化を援用することで解決しようとした。特に、S/T に基づくカテゴリー化は(a)Full Recognition Elaboration, (b)Partial Recognition, (c)Complex Recognition からなるが、本研究では(b)の概念に着目した。(b)はさらに、(i)Contrastive, (ii)Substantive, (iii)Augmentative に分類されるが、主題非明示型結果構文の拡張は(iii)に相当するものと位置付けた。Langacker (ibid.)は、(iii)の増幅的拡張はブレンディング(blending)の例に相当すると主張している。主題非明示型結果構文は、結果構文と中間構文の特性の一部を換喩に基づいて継承し、増幅的に拡張し最終的には他の構文に還元できない特性までをももつものになっているわけであるから、(iii)のプロセスに従って拡張したものであると本研究では特定した。それぞれの構文の事態は人間の捉え方を反映しているという認知文法の基本方針に寄り添えば、構文の特性は人間の認知メカニズムを反映していることになる。したがって、主題非明示型結果構文の特性の継承関係についても、結果構文や中間構文から認知メカニズムの一部を認知操作としての換喩に基づいて引き継いでいるということを示した。以上ことから、この構文は、結果構文と中間構文が融合することにより創発し、主要構文として定着しているこれらの構文をリンクする橋渡しの構文として位置付けられるものであることが実証された。

さらに、(3)について、主題非明示型結果構文はタイプ頻度及びトークン頻度が低く、定着度も低いわけであるから、萌芽的構文でもある。上記で見たように、この構文は結果構文と中間構文が融合することにより創発したわけであるが、当初は“Persil washes whiter!”のように、定型表現であったと考えられる。構文化理論では、定型表現からある項目が開放的となり、いわば部分的スキーマが取り出されて拡張する表現を“snowclone”と呼んでいるが、主題非明示型結果構文も“snowclone”の一種に相当すると考えられる。例えば、主語名詞句が(限定された種類で)開放的となり“DETERGENT wash/es whiter”(e.g. Fab washes whiter without bleaching. / New Jet now washes even whiter. (現在のニュージェットはさらに白く洗えます)(ジーニアス英和辞典第 4 版: even 頁))のような構文変化(constructional change)を起こしたり、さらに“INTSRUMENT wash/es AP-er”(e.g. Our new washing machine washes cleaner.)のように構文化(constructionalization)している。つまり、主題非明示型結果構文は、構文化の一環としての“snowclone”化の道を確実に歩んでおり、ダイナミックに拡張しつつあることが分かった。

## <研究課題 2> の研究成果

橋渡しの構文としての無生物主語構文をめぐって、(1)構文ネットワークの観点から、使役有生構文(Causative Animate Construction, CAC)から無生物主語構文(Inanimate Subject Construction, ISC)を経てセッティング主語構文(Setting-Subject Construction, SSC)までが勾配を示す連続体であることを実証すること、(2)これらの構文の仮定される創発順序にしたがって、無生物主語構文の創発のメカニズムはどのような認知操作によって動機づけられているのかを明らかにすること、以上の 2 点の解明を目指した。

まず、(1)について、次の仮説を立てた。

**仮説:** 構文ネットワーク上、CAC, ISC, SSC のカテゴリーの境界は曖昧(fuzzy)であり、動的で緩やかな連続体(continuum)を成している。その場合、境界線上の成員が存在し、その成員が構文ネットワーク上の節点となる橋渡しの構文として機能している。ゆえに、これらの構文は 1 つの構文的家族体を形成している。

(對馬 2020: 306)

この仮説を検証するために、各構文の事例の他動性(transitivity)を調べる必要があった。そこで検証法として、英語母語話者へ聞き取り調査を行うことにした。具体的には by 句を用いた受動化に関する内省テストを実施した。なお、受動化テストにおいては、様々な語用論的情報が影響すると考えられるが、意味論的な他動性の概念を試すため、基本的には短文を用いた。そのところ、使役有生構文を受動化したものは完全に容認された。一方で、セッティング主語構文は全く容認されなかった。この相違は、人間の認知の仕方としての捉え方の違いに起因していると考えた。具体的には、使役有生構文は認知文法でいうところの「行為連鎖(action chain)」の関係に基づいて、他方、セッティング主語構文は「容器・内容物(container-content)」の関係に基づいて把握さ

れている。その一方で、無生物主語構文は受動化テストにおいて、完全に受動化が認められるもの、やや認められるもの(?)、容認されづらいもの(??)、容認されないもの(\*)などのように容認度が分かれる結果となった。このことは、無生物主語構文の中には、使役有生構文のように行為連鎖の関係に基づいて把握される事例、そしてセッティング主語構文のように容器・内容物の関係に基づいて解釈される事例、あるいは、その中間的なものとして解される事例があり、他動性の解釈には揺れが見られる、ということを示唆している。そこで、他動性の判断に基づき、無生物主語構文を行為連鎖の関係に基づいて解釈されるものを ISC1、容器・内容物の関係に基づいて捉えられるものを ISC2 と分類した。また、受動化テストでは、ISC1 とともに ISC2 とともに判断できない事例もあり、これはそれらの中間的な境界線上の事例であると認定した。

以上のことに基づいて、次のようなネットワークが得られるものとして結論づけた。

#### CAC, ISC (ISC1, ISC2), SSC の構文ネットワーク:

- a. CAC, ISC, SSC は、構文ネットワーク上、動的で緩やかな連続性を示す 1 つの構文的家族体を成している。
- b. ISC は ISC1 と ISC2 に区分され、CAC と SSC を結ぶ節点となる橋渡しの構文である。
- c. 構文的家族体の中で、確立されたユニットとしての成員(CAC, SSC)、もしくは、境界線上の成員(ISC1, ISC2)としての認定は、概念化者による事態把握の構図(行為連鎖に基づく事態認知 vs. 容器・内容物に基づく事態認知)に依存しており、その事態把握は動的であるために、構文ネットワーク上でも柔軟なカテゴリーが形成される。

(對馬 2020: 311)

次に(2)に関して、CAC, ISC, SSC はいずれも定着した言語単位であり、スキーマとしての他動詞構文の具体事例である。動作主性の観点からすると、CAC が最も典型的な事例であり、拡張の原点であると考えられる(cf. Lakoff and Johnson 1980)。意味論的にはそこから ISC が発生し、さらに SSC が創発した順序が仮定される(ただし、拡張の順序に関しては、通時的な発生・使用の検証及び共時的な量的調査などを行う必要があり、これらの点は研究を改めたい)。特に、ISC は CAC と SSC を結ぶ節点となる構文単位である。橋渡しの構文に関わる認知メカニズムとして、まず、CAC, ISC1, ISC2, SSC に関わる概略的共有フレーム知識を次のように設定した。

**CAC, ISC1, ISC2, SSC に関わる概略的共有フレーム知識:** < (手段)あるセッティング(S)を用いることによって、(原因)ある実体(X)が自らの力を行使し、その結果、(結果)もう一方の実体(Y)が特定の変化を被ったり、(目的)セッティングの中で実体(Y)が行動や経験をするとする目的を果たす >

(對馬 2019: 158)

これに基づいて、CAC, ISC1, ISC2, SSC の個々の構文は、共有フレームのうち①~③のどのフレームが活性化されるのかによって区別され事例化されるのか、ということについて検証した。

#### 各構文のフレーム知識:

- a. CAC: < ある有生物の動作主(X)が自らの力を行使し、その結果、ある被動作主(Y)が特定の変化を被る > (X=主語, Y=目的語)
- b. ISC1 < ある無生物の動作主(X)が(備わっている)自らの力を行使し、その結果、ある被動作主(Y)が特定の変化を被る > (X=主語, Y=目的語)
- c. ISC2 < あるセッティング(S)を用いることによって、その結果、セッティングの中で行為者(Y)が行動をするという目的を果たす > (S=主語, Y=目的語)
- d. SSC < あるセッティング(S)を用いることによって、その結果、セッティングの中で経験者(Y)が経験をするとする目的を果たす > (S=主語, Y=目的語)

(ibid.: 159, 一部修正)

CAC から ISC1 へは、活性化しているフレーム と の基本形は同じものの、X の有生物から無生物への「隠喩」による拡張が起きている。他方、ISC1 から ISC2 では、活性化しているフレーム の中で(結果)から(目的)への移行があり、さらに活性化されるフレーム自体の変化として から への移行があり、これらは「換喩」によって捉えられる。さらに、ISC2 から SSC への拡張は、活性化しているフレーム と の基本形は同じものの、Y の行為者から経験者への「隠喩」による拡張が起きている。結果として、それぞれの構文は、概略的フレーム知識を共有しつつ、認知操作としての換喩や隠喩に基づいて構文ごとにフレームの一部の活性化の度合いを変えることで概念化されることが明らかになった。

#### < 研究課題 3 > の成果

萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムについて、< 研究課題 1 > 及び< 研究課題 2 > の成果に基づき、使用依拠モデルを援用し構文ネットワークと関連づけて次の通り一般化を行

った。

### 萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズム

- a. 萌芽的構文・橋渡しの構文は、隣接するより確立された言語単位としての主要構文の認知メカニズムの一部を認知操作としての換喩あるいは隠喩に基づいて継承する。その際に、構文に反映される事態を捉える人間の認知メカニズム（あるいは、認知操作）の微妙な差異がネットワーク形成に影響を及ぼす。
- b. 創発には、(1)確立された主要構文[A]と[B]の融合(amalgam)によって新奇の萌芽的構文・橋渡しの構文(C)が発生する場合、(2)確立された主要構文[A]から橋渡しの構文(C)あるいは[C]を経て主要構文[B]が発生する場合、(3)新奇の萌芽的構文(C)が構文化により発生する場合、の少なくとも3つの過程がある。  
(\*注:[ ]は定着した言語単位を、( )は新奇の、あるいは、それほど定着していない言語単位を表す)

a に関しては、本研究が事例と取り上げた萌芽的構文・橋渡しの構文としての主題非明示型結果構文と橋渡しの構文として取り上げた無生物主語構文のどちらの事例にも当てはまる。また、b に関しては、(1)のプロセスでは、[A]が結果構文、[B]は中間構文に相当する。そして、(C)が主題非明示型結果構文に当たる。また、(3)の(C)は主題非明示型結果構文の萌芽が見られたのちに、構文として確立していく途中経過にあるもの(つまり、“snowclone”化)を表している。さらに、(2)のプロセスでは、[A]が使役有生構文、[B]がセッティング主語構文に相当する。また、[C]が無生物主語構文に相当する。

全体の結論として、萌芽的構文・橋渡しの構文は、主要構文を動機づけている人間の認知メカニズムの一部を認知操作に基づいて継承することで創発し、そうした部分的な認知メカニズムの重なりによりネットワーク上、主要構文と連続体を成していることが分かった。萌芽的構文・橋渡しの構文は決して些末な言語単位ではなく、私たちの一般的認知能力の現れとしての認知メカニズムを反映しており、定着した主要構文同士を動機づける重要かつ重大な役割を担っている。そして、萌芽的構文・橋渡しの構文の創発のメカニズムを究明することは、脳内で生じている豊かで緻密な構文ネットワークを解明することに貢献することになると言える。

### 引用文献

- Aarts, Bas. 1995. “Secondary predicates in English.” In: Bas Aarts and Charles F. Meyer (eds.) *The verb in contemporary English*. 75-101. Cambridge University Press.
- Aarts, Bas. 1997. *English Syntax and Argumentation*. Macmillan Press.
- Bybee, Joan. 2007. *Frequency of use and the organization of language*. Oxford University Press.
- Bybee, Joan. 2015. *Language Change*. Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. 1982. “Frame Semantics.” The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. 111-137. Hanshin Publishing Company.
- Fillmore, Charles J. 1985. “Frames and the Semantics of Understanding.” *Quaderni di Semantica*. Vol. 6. No. 2. John Haiman. 1980. “DICTIONARIES AND ENCYCLOPEDIAS.” *Lingua*. 50. 329-357.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press
- Langacker, Ronald W. 1987/1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1/2*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. “Constructions and constructional meaning.” In: Vyvyan Evans and Stephanie Pourcel. (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*. 225-267.
- Traugott, Elizabeth Closs. and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- 對馬 康博. 2019. 「橋渡しの構文のカテゴリー形成に関わる認知操作について 無生物主語構文の事例を中心に」 『日本認知言語学会論文集』 第19巻. 151-163.
- 對馬 康博. 2020. 「構文的家族体のカテゴリー形成における境界線上の成員の特性について 英語の使役有生構文・無生物主語構文・セッティング主語構文の事例」 米倉よう子・山本修・浅井良策(編) 『ことばから心へ 認知の深淵』 302-313. 東京: 開拓社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 對馬 康博	4. 巻 -
2. 論文標題 構文的家族体のカテゴリー形成における境界線上の成員の特性について 英語の使役有生構文・無生物主語構文・セッティング主語構文の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 米倉よう子・山本修・浅井良策（編）『ことばから心へ 認知の深淵』	6. 最初と最後の頁 302-313
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 對馬 康博	4. 巻 19
2. 論文標題 橋渡しの構文のカテゴリー形成に関わる認知操作について 無生物主語構文の事例を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 151-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhiro Tsushima	4. 巻 58
2. 論文標題 The Cognitive Network of Implicit Theme Resultative Constructions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of the English Literary Society of Hakodate（函館英文学）	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yasuhiro Tsushima
2. 発表標題 The Constructionalization of Implicit Theme Resultative Constructions as a 'Snowclone' in English
3. 学会等名 15th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 對馬 康博
2. 発表標題 橋渡し的構文のカテゴリ形成に関わる認知操作について 無生物主語構文の事例を中心に
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuhiro Tsushima
2. 発表標題 The Fuzziness in Categorization of A Constructional Family: A Case of Causative Animate Construction, Setting-Subject Construction, and Inanimate-Subject Construction in English
3. 学会等名 10th International Conference on Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuhiro Tsushima
2. 発表標題 The Cognitive Mechanism of the Genesis of Emergent and Bridge Constructions
3. 学会等名 14th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考